

観 土 日

平成2年7月

第13号

年2回発行

発集発行

小出真行



大慈は樂を与え

大慈は苦を抜く

秘蔵宝鑰より

としとれば

(六)

またしても

同じ話しに

子をほめる

達者じまんに

人はいやがる

仙崖・老人六歌仙



何でも子を誉めることは、悪いことではありません。しかし、同じ話しを何度も繰り返しますと、自慢という「おごり」におち込んでしまいます。達者なことは誠に慶ばしいことですが他の人の前ではこの慶こびを表さず、心の中で慶こびましょう。そして、若い人に負けないうように、黙々と自分の仕事を行っているお年寄は、美しく又尊くすらみえるものなのです。

「廻向」



私達はよく故人の追善の廻向をするために関係者を招いて法要を催し墓参りや寺参りをいたしますが果たしてそうすることに、故人の菩提がと弔われ、霊がうかばれるのか疑問に思われる方がいるでしょう。

廻向とはサンスクリット語で「パリナーマヤ」^{マヤ}といい「熟させる」とか「向けること」を意味し、自らが修めた行為の功德を他に施すことによって、自他ともに救われることを指します。

仏教では、もともと自業自得の原理を説き自分の行為は他に転移できるものではないといわれてきましたが、大乘仏教では運命の共同体としての人間の営みを重視し、お互いが依存し合っているのですから、ともに救われていく道を求めているのです。

これはちやうど、樹木と葉の関係にたとえられましょう。一つ一つの葉はそれぞれ独立した存在で、炭酸同化作用をして、炭酸ガスを水と太陽の光によって葉はそれぞれ澱粉という炭水化物を合成し、酸素を放

出しています。そして、この澱粉は葉脈を通じて樹木全体の生育に活用され、幹や枝をどんどん伸ばしてゆくのです、一つ一つの葉は自分のためとか樹木のために意識的に働いているわけではありません。ただ、他のエネルギーの恵みを受けてごく自然に発育しているのです。

私達人間も同じ様に、それぞれ個々が独立した生活を営んでいます。物理的に自分が他の生命にとってかわることは決して出来ませんが、精神的な影響をわかち合うことはできます。他の苦しみや喜びを自分のものとし、自分の苦しみや喜びを他のものとし、ともに苦楽をわかちあうことによって、ともに救われていく道が聞かれるのです。こうした「^{マヤ}拔苦与楽」の大慈悲の精神が大乘仏教の特徴になっています。

「喜びは、ともにわかちあえば倍加し、悲しみは、ともにわかちあえば半減する。」といえますので、冠婚葬祭などのつどいが関係者の間で行われ、それが人間的な営みになっています。私達はそれぞれもちろん独立した存在であります、孤立した存在ではありません。

故人への追善廻向も同じ様に、法要を営み、仏菩薩を刻み、寺院に金品などを寄進することによって、その功德を故人の菩提にふり向けることは、原始仏教時代からすすめられ、先祖の報恩を強調する中国に仏教が伝来して増幅され、わが国でも古来の祖先崇拜信仰と合体して広く伝わり今日に至っています。

廻向には、往相と還相の両面があります。往相とは自分が救われようと願うことで、そうすることによって救いが向こう側からもたらされることで還相と申します。追善廻向の法要を営んで、自分が救われようと思いたち、実行することによって、法要を縁としてその功德は仏様の方から、自分や参会者にもたらされることになります。廻向とはこのように仏事を中心に功德は自分から他に、他から自分に廻りめぐりくるのです。従って法要は、するのではなく、させてもらうといえましょう。



「お施餓鬼」



昔、インドでお釈迦さまがご在世の頃、お釈迦さまの十大弟子の一人に阿難尊者という方がおられました。この阿難尊者は、お釈迦さまの従兄弟にあたられる方で、常にお釈迦さまのお側において身の回りのお世話をされており、お釈迦さまがお出かけの時は必ずお供をしておりました。

この阿難尊者がある夜、森の中で坐禅をしていますと、髪を振り乱し、腹は大きくふくれ、手足はまるで骨と皮だけのやせ衰えた焰口餓鬼が現われて、ものすごい形相で口から焰を吐きながら阿難尊者に向かっています。

「お前の命は、後三日しかないぞ、そして餓鬼道に落ちて苦しむのだ」
驚いた阿難尊者は

「どうしたら、餓鬼道に落ちなくてすむだろうか」
と尋ねますと

焰口餓鬼は

「我々の仲間のために沢山の食物を施し、ありがたいお経を説いてくれれば我々も助かるし、お前の命も延してやろう」というのです。そこで阿難尊者はそのことをお釈迦さまに報告しますと

お釈迦さまは、

「では、加持飲食陀羅尼を唱え、沢山の食物を施すための法要を営むがよい」とお示しになりました。

阿難尊者は、多くの僧侶のお力を借りて、いわれた通りの法要を行いましたところ、餓鬼も阿難尊者も救われたということです。

お施餓鬼の行事はこの伝説を元にして始まり、やがて中国に伝わって梁の武帝の頃、水陸に食物を投げてお施餓鬼の法要を勤めたことから「水陸会」ともいわれるようになります、やがて、日本でも平安時代の頃伝来し、次第に広まったのです。

そんな訳でお施餓鬼の法要は、飢えに苦しむかわいそうな者を救うためばかりでなく、延命長寿をも祈念する目的もあるのです。ですからこの行事はいつ行ってもいいのですが、特にお盆の季節は行なわれることが多いのは、餓鬼道に落ちて苦しむ母親

を救った、日蓮尊者の伝説に似ているところから、お盆の行事の中に取り入れられるようになったのです。

私が高野山の専修学院（修行道場）にいたころ、毎食事の際に「出生飯」といって、ご飯を数粒、自分が食べる前に取り出し、その日の当番がそれを集め一定の場所に置き、野鳥に施します。この狙いとするところは、今こうして食事の出来る幸せを感じ、併せて餓鬼、畜生にもおすそ分けして、思いやりや施しの心を喚起させるための習慣でした。こうして自分以外のために、余分に飯粒を取り出すことから、物の数をわざと余分に数えたりすることを、サバを読む、というように、世間一般でも使われるようになったのです。

よく子供のことを「このガキめ」などと言いますが、子供は好物の食べ物を見るといくらでもガッガッ貧るように食べ満腹しても、まだ押し込もうとします。そうしたガッガッして満足をしらない姿を仏教では「餓鬼」といいますが、それと子供がよく似ているところから出た言葉なのです。しかし、よく考えてみますと、これは何も

子供に限ったことではなく、私達大人もガッガッした不平不満だらけの「ガキ」の心をお互いに持ち合わせております。

割ってみせたや私の心

割れば色気と欲ばかり

という川柳がありますが物欲、金銭欲、名誉欲、性欲といった浅ましい「ガキ」の心を持った人間は数限りなく多いですね。ですから贈賄、収賄などという「ガキ」の犯罪は、上は新聞紙上を賑わした国を動かす人物から、下は、小さな工務店にいたるまで後を断ちません。

でも考えを変れば、もっと楽をしたいという不平不満や欲望があるからこそ、文化は発展するのです。例えば電化製品や車、飛行機等の乗り物等もそうです。このように不平不満が正しく行使されれば文化は発展しますが、エスカレートして醜い形が出てきますと犯罪に結びつくのです。車も便利な文明の利器ですが一歩誤れば元も子もなくなりません。要するに不平不満や欲望もそれぞれ時々反省というブレーキをかけないと醜悪な「ガキ」に陥ってしまうのです。

「ガキ」とは、「とらわれ」「しがみつ

いた浅ましい心」の状態なのです。ですから不平、怒り、欲望、愚痴などの「ガキ」の状態から脱するには、逆に「とらわれから離れる」、「手放す」ことなのです。

具体的にいうならば、「布施」の心なのです。これは、施しの心を自分に呼び起こすことです。ケチケチした物惜みの心を「手放す」、「施す」ことによって感謝と喜びのある清いな心になるのですから、「ガキ」にならないよう気をつけましょう。

観音さまの御縁日

「四万六千日」

観音さま（観世音菩薩）の特定の功德日として、七月十日に参詣された人は、向こう四万六千日参詣したと同じ程の功德に相当するという説による縁日のことです。又、この観音さまの功德は毎月一回（十八日）定められた日に参詣いたしますと、九十日及び四万六千日の功德があるとまいわれています。この七月十日の縁日で代表的なお寺は、浅草寺（ほおずき市）をはじめ関東地方に多いようです。

この四万六千日の数については、色々俗説がありますが仏典にはこれに相当する数は出ていません。しいて根拠を求めると、釈摩訶術論の本覚（衆生の本来有しているさとの本体）の信の思想が根底になっているらしいのです。ともあれ、一日参詣したことで、四万六千日の功德をいただけるのは私達衆生としては有難いですね。

